

2023年 2月号

一般社団法人被曝と健康研究プロジェクト

<http://hibakutokenkou.net/>

今、フクシマの声を



311子ども 甲状腺がん 裁判

東京電力福島第一発電所の事故によって放出された放射性物質によって被曝し、甲状腺がんになった若者が東京電力を訴えています。応援してください。

ホームページ

311甲状腺がん子ども支援ネット | 🔍

<https://311support.net>



上記団体へのご寄付： ゆうちょ銀行 店名 ○一九 当座 口座番号 0393240
姓名、メールアドレス、寄付名義人=自身、団体、匿名など記入。詳しくはHPに。

いま、フクシマが忘れ去られようとしている。

政府は、「フクシマの教訓」と言いつのって、

放射線の被曝基準 年間1ミリシーベルトを無きものにし、

廃棄物を海洋に投げ捨て、原発の再稼働、新設を行おうとしている。

メディアも、ほとんど報道を忘れた。

いま、フクシマの声を聴くべきではないのか。

甲状腺がんに苦しみ、裁判に訴えた勇気あるフクシマの若者の声を聞いてほしい。

7人の口頭弁論陳述を順次紹介する。(編集責任・田代真人)

一般社団法人「被曝と健康研究プロジェクト」役員

顧問

有馬理恵 劇団俳優座女優

石塚健 医師

沢田昭二 名古屋大学名誉教授、理論物理、内部被曝研究者

曾根のぶひと 九州工業大学名誉教授

玉田文子 医師

西尾正道 北海道がんセンター名誉院長

本行忠志 大阪大学医学系研究科教授

松崎道幸 道北勤医協ながやま医院

矢ヶ崎克馬 琉球大学名誉教授

代表理事 田代真人 ジャーナリスト

理事 浅野真理、住田ふじえ

監事 三宅 敏文

「LETTER」の内容についてのご意見は下記へお寄せください。

一般社団法人 被曝と健康研究プロジェクト 代表 田代真人

〒325-0302 栃木県那須町高久丙407-997

Eメール：masa03to@gmail.com

同封の振替用紙は、当法人へのご寄付用です。よろしくお願い致します。

意見陳述要旨 2023年1月25日 原告7

「こんな裁判が起きたみたいだよ」

ちょうど1年前、父から、ある新聞記事を見せられました。

甲状腺がんとなった私と同じ年代、私と同じ福島出身、私と同じ境遇の人たちが裁判を起こしたことが書かれていました。

「この裁判について知りたい」

父にお願いして、弁護士さんに会う機会を作ってもらいました。すぐに話を聞きに行き、裁判に参加することを決意しました。

それまでの私は、「裁判」という言葉を聞いただけで嫌悪感がありました。でも、甲状腺がんになった原因をはっきりさせるためには、こうするしかない、強く感じたからです。

1 5回目の検査

甲状腺がんが見つかったきっかけは、2年前の1月に受けた福島の甲状腺検査です。

甲状腺検査には家族4人で、車で行きました。大学3年の時、父の仕事の都合で、家族全員が上京したため、東京の美大に進学していた私も、一緒に暮らすようになっていました。

車を運転していたのは父でした。病院に向かう途中に道に迷い、予約時間を30分も過ぎているのに、急ぐ様子もないので、私と母がイラついていたのを覚えています。

「県民健康調査」の甲状腺検査を受診するのは、今回が5回目です。

中学生の時に1回、高校生の時に2回、大学の時に1回、受けました。なので、今回の検査も、これまでと同じように、すぐに終わると思っていました。

ところが、検査をしている女性が首を傾けながら、エコー画像を見ているので様子がおかしいと感じました。長い時間がたち、ようやく検査終了かと思ったら、その女性が「少々、お待ちください。」と言って裏の方へ行き、今度は別の女性を連れてきて戻ってきました。そして、その女性が、また同じように検査を始めたので、ふと不安がよぎりました。

「お疲れ様でした。」と言われて検査室から出ると私より後に検査室に入った妹が既に外で待っていたので、不安はさらに高まりました。

2 がんの告知

一次検査の後も、不安はありましたが、いつ結果が届くかわからないので、普通に過ごしていました。その頃、私は大学卒業間近で、卒業制作にかかりっきりでした。美大なので、卒業制作が完成しなければ卒業できません。

まさに卒業制作に追われていた2月中旬、1次検査の結果が届きました。見ると「二次検査を勧めます。」

と書いてあります。でも卒業制作展に向けて忙しく、何も考えることができませんでした。

ようやく、2次検査を予約したのは卒業後です。すでに夏が間近になっていました。2次検査を受診できる病院は、都内では3ヶ所だけです。自宅から一番近いという理由で、虎の門病院を選びました。

病院へは一人で行きました。30度を超える猛暑日でした。虎ノ門駅の出口から外に出ると、まわりがビルだらけだったのが印象に残っています。

スマホでグーグルマップをみながら、少し迷いながらまだ新しい高層の病院に到着しました。

エコー検査は、1次検査の時ほど長くはありませんでした。先生は、メガネをかけたおばあさんです。フランクな感じだったので、あまり緊張はしませんでした。「やはり影分あるから細胞診をやしましょう。」その場で結果を聞かされ、続けて細胞診をすることになりました。

「痛くならないようにするから、耐えてください。」

そう言われて、3回、針を刺されました。痛みはそれほど感じなかったけど、首を針で刺しているのが、不快でした。ずっと上を向いていなければならず、首がつかかった。早くおわってくれと思っていました。

1週間後、また一人で細胞診の結果を聞きに行きました。先生から「悪性」と告知を受け、「1cm以上あるから手術をしなければいけない状態だ。」と説明されました。私はその言葉を聞いて頭が真っ白になってしまいました。

これまでの検査では、そのたびに「問題なし」と言われてきました。1回目と3回目はまったく所見がない「A1判定」、2回目と4回目はのう胞があり「A2判定」でしたが、がんの兆候はまったくありませんでした。なので、悪い結果を予感があったものの、せいぜい経過観察ぐらいだろうと甘く見ていたのです。まさか手術が必要になるとは思っていませんでした。

「手術後回しにすると、転移とか悪い方向にいくだけだから。手術を勧めざるを得ない。」

先生から、そう説明を受けました。

帰りの電車で何を考えたのか。全く覚えていません。心の中は、ただただ「無」だったと思います。

3 手術

それから2ヶ月後、新宿の病院で手術を受けることになりました。手術の時も一人で入院しました。コロナの影響で、両親が病室に入れなかったためです。

手術は、流れ作業のような感じでした。手術前は、手術用の服を着て、帽子を被ります。なで型なため、肩のマジックテープがうまく止まらなかったり、髪の毛が長くて、帽子にうまく入らなかったりして、少しイライラしました。手術室に入り、手術台に横になると麻酔が入り、一瞬で意識がなくなりました。

辛かったのは、麻酔から覚めた後の24時間です。術前に、看護師さんから

「手術後24時間は寝たきり状態」だと聞いたときは、「え。」と思いつつ、「まあ大丈夫」と思っていました。

でも、実際にやってみると本当に辛い。寝返りは全くできず、手足も動かせない。動かしているのは、手首と足首だけ。体は硬直しているのに、頭は冴えきり寝てるいだけで、こんな苦痛なのかと思いました。

24時間経つと、体を起こすことは許されましたが、首を動かすことはできません。無理に動いたら傷口が開くんじゃないかと不安で、身体中に、変に力を入れていました。そのせいで頭も痛くなり、苦しい時間が続きました。

ご飯もお粥です。最初は、まるでお湯のようなドロドロの重湯で、味がなくまずい。最初は無理して食べていたけど、気持ちが悪くなり、麦ご飯になるまで、おかずしか食べませんでした。

4 退院

一週間ほど入院して、やっと家に帰れる時は、嬉しかった。退院時に支払う金額が18万ぐらいだったので自分で支払うことができず、父に病院まで来てもらいました。

病院の外に出ると、近くにコメダ珈琲があったので、「入ろうか」と、父と二人で入り、昼食を摂りました。食べたのは、ビーフシチューです。「やっとまともな食事だよ」と、残さずに食べました。カフェオレにソフトクリームがのっている「クリームオーレ」も飲みました。

ただ、退院しても、開放的な気持ちにはなれなかった。退院時に先生から、「首はゆっくりうごかしてもいいけど、気をつけて。」「車でバックする時とかは気をつけてね」と言われていたため、首を動かしたら、傷口が開くんじゃないかと気がかりで、とにかく怖くて、首を動かせなかった。特に起き上がる時は、どうしても首に力が入るので、その度にビクビクしていました。

首を固定するために、常に肩から頭にかけて力を入れていたせいか、人の声が頭に響き、ちょっとした音でも、気になるようになりました。夜中のバイク音など、ちょっとしたことにもイライラするようになりました。

また当時は、手術痕の上に、腫れ止めのテープを貼っていました。このテープは粘着力が強く、喋ると皮膚が引っ張られるので、それも辛かった。

慣れないうちは、剥がす度に激痛が走るのでも、それだけで30分以上かかっていました。しかも最初の頃は、自分でできず、母にやってもらっていましたが、母も初めてだったので時間がかかり、「早くしてよ!」と怒鳴ってしまうこともありました。

こんな時、父や妹から「怒る事ないでしょ?」と言われていましたが、分かっているけど、どうしても冷静になれなくて「うるさい! あんたらは黙って!」と返していました。

この頃は、家族ですら敵に見えたり、誰かが自分の噂をして、貶(けな)しているんじゃないかと疑ったり、情緒不安定な時期が続きました。

家族は柔らかい感じで話してくれていたけれど、家族に「うるさい」と言ったり、怒鳴り声をあげることもありました。病院で「当分の間、大声をあげるのはやめてください」と説明されていたのに、辛いし、イライラしてしまって、家族に怒鳴ってしまった。

絵を描くために座っていることも苦痛になり、以前はできていたことができなくなったことも苦痛で、精神的にギリギリな状態でした。

大学はすでに卒業しているので、就職のことを考える必要がありましたが、絵の仕事につける自信も持たず、体力的にも、精神的にも限界だったので、どうでもよくなっていました。ずっと家に引きこもり、誰と

も話さない日々でした。

それが、少し楽になったのは、退院1ヶ月後の診察後です。「一ヶ月経ったから、首を動かして大丈夫」そんな医師の一言がきっかけで、首をうごかせるようになり、精神的にも体力的にも少しずつ余裕もてるようになりました。頭痛も改善していきました。

ところが、気持ちが落ち着いてくると、今後は、自分は一体、何をしているんだろうと、自分で自分を責める時間が増えました。

5 裁判

裁判のことを知ったのは、ちょうどその頃です。私は当時、甲状腺がん手術で辛い思いをしたのは、自分の落ち度が原因だと思っていました。

私は、今まで何度も県民健康調査で検査を受けて、「健康だ」と言われてきたので、甲状腺がんの問題は、「自分には関係ない」と無意識に思っていました。みんな色々というけど、何もないんだったら、調べる必要ないじゃんと思っていました。

事故から10年。自分が甲状腺がんになるまで、この問題に触れてこなかったのは、私の落ち度かもしれない。裁判の話を書くまではずっと、自分がダメなんだと自己完結していました。

でも、裁判があることを知り、私と同じような人がいることを知って、勇気をもらいました。

東日本大震災と原発事故が起きた時は、小学生だったので、当時のことは、ほとんど覚えていません。あの事故が、自分の病気に関係しているのかもしれない。

裁判を知ってから、甲状腺がんになった人が福島県内だけでも300人以上いることを知りました。自分が思っているよりもはるかに多い人が甲状腺がんを苦しんでいる。この事の重大性を知り、今、立ち上がらないといけなと思いました。

自分と同じように辛い手術を受けている人、言われのない暴言を言われている人。

このままだと自分だけではなく、他にも苦しんでいる人が大勢いるのに、死ぬまでずっと曖昧にされたまま終わらせてしまう。自分自身の窮地を脱するためにも、自ら立ち向かって行かなきゃいけないと思いました。

6 最後に

裁判に関するネット記事を見ていた時、Yahooニュースのコメント欄に

「気持ちはわかるけど、過去のことなのだから、前を向いて進むべき」という、そんな書き込みを見つけました。

いつまでも過去に囚われていたら、あなたにとって良いことないよと善意で書いたのかもしれないけれど、私は強い反発を覚えました。

確かに過去に起きたことだけど、大切なのは、未来にどう繋げるかのはず。悲惨な事故のことは忘れてはいけなし、なかったことにはしてはならないと思いました。そうしなければ、また同じことを繰り返

返し、私たちと同じ被害者を生んでしまいます。

4回検査を受けても、見つからなかった甲状腺がんが、2年間で1センチ以上も大きくなり、5回目の検査で手術が必要になったのは何故なのか。クリーニング効果によるものなのか、過剰診断なのか、被曝の影響なのか。

裁判は、今まで謎にされてきたこと、事実を明らかにする場だと思っています。私はそのために、今、ここにいます。

裁判官のみなさん。

私たちは今、匿名で戦っていますが、一人ひとり名前があります。私の名前はわかりますか。

かつての私のように、裁判官の皆さんにとっては、ひとごとかもしれません。私がそうだったから、痛いほどわかります。

でも、私たちがなぜこのように立たざるを得なかったのか。それだけでも理解してほしいです。

以上

意見陳述要旨 2023年1月25日 原告4

1、現在の生活

朝起きると必ず歯磨きをして水を飲む。150mg のチラージンと一緒に。

スピード感ある今の職場に転職して半年。仕事は忙しいが、日々、充実感がある。

今日も遅くまで仕事をしすぎた。疲れたので、夜ご飯は、最寄駅のマックでいいかと思うが、最近、野菜をあまり食べていない。働きすぎで、気持ち喉に腫れを感じる。マックはやめておこう。

手術痕のあるところ触ることが癢になった。腫れを感じる時は、手を当てると少し違和感が和らぐ。

がんと共に生きる生活は7年になる。旅行の準備も、着替えや化粧水などと一緒に、最後に必ず、薬を持ったか、確認することが当たり前になった。

普段、意識はしない。がんは、ただ常に側にある。

2、検査

その全ての始まりは、大学2年生の時の北海道旅行だった。

地元・福島を出て東京で一人暮らしをはじめて2年が経ち、東京の生活に少しずつ慣れ始めていた夏休み直前、父から「札幌に旅行するから一緒に来ないか」と誘われた。初めての北海道。二つ返事で着いていくことにした。

夏休みは地元の友人と会う目的もあり、毎年、必ず福島に帰省している。その福島から仙台に行き、フェリーで北海道の苫小牧に向かった。

2泊3日の家族旅行。札幌の大通り公園など観光名所も回ったが、旅行の目的はもう一つあった。

妹の甲状腺検査だ。年の離れた妹は、原発事故当時は保育園に通っていた。その妹の健康を心配して、父が札幌の病院を予約していた。

「ついでだから、お前も受診しろ」

言われるがままにエコー検査を受けると、医師から「見たことがない映り方をしている」と言われた。何が何だか分からないまま、ただ父と医師が話す様子が記憶に残っている。後で知ったことだが、この時、父は「乳頭がん」と伝えられたという。

3、初めての手術

札幌でがんと診断されてからの手術までの記憶はあまりない。自分は、父親のがんと告知を受けた事実を知らず「自分の身体（からだ）にどこか良くないところがあるのかもしれない」その程度でしか理解していなかった。

父が知り合った大学教授を介して、広島にいる専門医に診てもらうことになった。チェルノブイリ原発事故後、ウクライナで、子どもたちの甲状腺がんを手術してきた名医だった。

自覚症状が全くなく、生活にも支障が出ていない。ただ自分は「がん」と診断されている。

「本当にがんなのか」

自分で理解出来ないまま、1 回目の手術を受けることになった。

初めての手術ということもあり、手術室に向かうまでの通路は、少し緊張しながら向かった記憶がある。術後しばらくは声が出なかったが、経過は良好で、後遺症もほとんどなかった。担当医の腕のせいかな。「こんなもんか」というのが正直な感想だった。

4、2 回目の手術

だが、半年も経たず、2 回目の手術を受けることになった。前回の手術で、全ての腫瘍を取りきれていなかったためだ。前回は、甲状腺を半分だけ摘出したが、今回は全てを摘出するという。でも、初めて行く島根県に、頭の中は半分旅行気分だった。到着した病院は、どこの地方にもありそうな大きく、古めかしい公立病院だった。

入院期間は、前回と同じ 1 週間。入院した 4 人部屋にいたのは、自分のほかには、7～80 代のおじいさん 1 人だけ。特に心配なこともなく、静かに時間が過ぎていった。

相部屋のおじいさんは、気さくで、部屋を出るタイミングや歯磨きする時など、会うたびに声を掛けてくれる可愛らしいおじいさんだった。

入院 2 日目、そのおじいさんが、オペを終えて部屋に戻ってきた。でも、手術前の様子とは全く異なり、表情はなく、面会に訪れた家族との会話もなく、ようやく絞り出した声はかすれていた。

その変わり果てた姿に、なぜかとても悲しい気持ちになり、翌日、自分の手術日を迎えたことを覚えている。

オペの朝。手術用の服に着替えて手術室に向かう。手術室の前で椅子に座り、少しだけ待機し、すぐに看護師に呼ばれてオペ室に入った。

オペ室の空間は、少し緊張する。

心電図や酸素濃度を測る器具を付けられ、麻酔が入ると、じんわりと意識が遠くなり、7～8 回深い呼吸をするとフッと意識がなくなった。

麻酔から目が覚めると辺りは真っ暗で、目が覚めてからも意識はぼんやりとしたままだった。後で知ったことだが、手術は7時間にも及んだという。

手術をした首だけでなく、腰、臀部（でんぶ）にも強い痛みを感じる。

尿道カテーテルが上手く機能していなかったため排尿することが出来ず、お腹が膨れ上がっていた。

ナースコールでそのことを伝えようとしたが、声が出ない。何回も、何回も、声を出そうとするが喉から息が漏れるだけで意思が伝えられない。

病室にやってきた看護師にジェスチャーをしたら、ようやく理解してくれたが、この時はじめて、自分の声、自分の言葉で、意思を伝えられないもどかしさを経験した。このまま一生。声に戻らなくなったらどうなるのか。

暗い手術室の中で痛みを耐えながら、声が出ないことに強い絶望を感じた。

しずまり返った部屋の中で、ひたすら鳴り続ける心電図の音を聞いていると、この時間が永遠に続くかのように感じた。

その時初めて、「こんなにも辛く、声も失うのなら、いっそ、死んだ方が楽かもしれない。」そう思った。

朝になっても、麻酔はなかなか切れなかった。声は出ず、身体（からだ）にはまだ強い痛みが残っている。家族が面会に来てくれても、反応する気力がない。

人の声だけが頭の中に残り、ただひたすら「何も考えたくない」という思いで心が閉じてしまっていた。

手術を終えてから丸一日が経過してからようやく麻酔による身体のだるさがなくなり、まだ枯れているものの、声も少しずつ戻ってきた。病室に来た家族を安心させるために、明るく振る舞えるくらいまでに、体調も回復してきた。

少しずつ声を取り戻す中で、今ある「当たり前」が、とても尊いものだ、と感じられるようになってきた。

入院期間は予定より長引いたが、10日ほどで退院となった。

帰りは、無事手術を終えたことを、広島のかかりつけ医に報告するため、父とふたり、JR山陽本線とバスを乗り継いで、広島に向かった。

山陽本線の窓からは、日本海を一望することができた。ボックスシートの向かいには、父が座っている。父は今どのような気持ちなのだろうか。音楽を聴きながら、窓の外のを眺めていた。

自分は、アヴィーチーというDJが昔から好きで、その時も、イヤフォンからアヴィーチーの「The Nights」が流れていた。父親が語った言葉と、あの夜のことを絶対に忘れない。父と息子のかけがえのない思い出を歌った曲だ。

「He said "one day you'll leave this world behind. So live a life you remember.

（父は言った。いつかお前もこの世を去る時が来る。だから、忘れられないような人生を送りなさい。）」そんなフレーズが丁度耳に飛び込んできた。

父の気持ちは分からなかったが、自分の中で今の手術の経験が重なった。そして、深夜の病室で死にたいと思ったことを深く後悔した。

「いつか死ぬなら、それまで、精一杯の人生を送ろう。」

「自分のことで、父親が負い目を感じさせたくない」

2度も首も切る手術をしたなら、もう半分死んだようなものだ。今までは、家族や周囲から見て無難な選択をしてきたけど、これからは自分の意志を大切にしよう。この時、そう心に決めた。

5、再発を繰り返す中で

甲状腺がんは、深刻な病気ではないと言われているが、自分の場合、結局、これまでに4回の手術を受けている。3回目の手術は1年後。就職活動の真っ最中で、手術日は、合同説明会の解禁日だった。

ただ2回目の手術を経て、全てが吹っ切れていた自分にとって、そんなことは気にならなかった。死を意識した日から、目の前のできることに集中してやりきりたい、そう思ってきたため、再発が分かっても気持ちがブレることはなかった。必要ならオペを受ける。そんな思いで手術に臨んだ。

オペ室に呼ばれるギリギリまで、就活に向けた自己分析に時間を割き、その2ヶ月後には、希望の会社に就職が決まった。

6、4回目の再発・手術

入社2年目。有休暇をとって彼女と広島に旅行に行った。広島には何度も、何度も来ているが、行くのはいつも病院だけ。実はよく知らない。

旅行の最終日、かかりつけ医に出向いて、エコーと細胞診を行った。首に太い針を刺し、細胞をグググッとスポイトの様に吸い上げる。

その場で、即座に診断してもらったところ、反回神経に隣接したリンパ節にがんの転移が見つかった。

「ああ、またか。仕事の休みはどうしよう。何回やっても、結局、再発のリスクはなくなるのか。」

そう思った。今回は仕事の関係もあり、手術は東京の病院で受けることになった。

オペの説明は父と聞いた。反回神経がすでに機能していないので、反回神経を切断し、気管切開を行うという。

いまいちピンとこないが、反回神経を切断すれば、声を失うか、話せたとしても、声帯が正しく機能せず、掠れ声になる可能性がある。少なくとも今の声は戻らない。当たり前のように説明する医師は、声がなくなることを考えた事があるのか。態度に出やすい父が、横でとても憤っているのを感じた。

「声は失くせない。」

仕事の合間を縫って、セカンドオピニオンを受けた。ファイバースコープで見ると、切断する予定の反回神経は、問題なく動いている。反回神経の切除は回避すべきとの意見書をもらいそれを主治医に持ち込んだ。

反回神経の切断はしたくない。それだけ。手術の直前に術式の変更が決まった。

入院もオペもなれた。全身麻酔にもだいぶ慣れた。何回か息をすると、身体がジリジリして意識が遠くなる。麻酔から覚める時は朝の目覚めとは少し違う。

声は大丈夫か。

誰かがいるかもしれないので小さく「あー」と声帯を動かす。

声は掠れて出づらい。ただ、声はある。ほっと胸を撫で下ろす瞬間。

食欲はないが食べ方がいいだろうと思い、毎食全て食べ切る。首を切った後は可動域が狭まるため、毎日ストレッチをする。

ちょっとずつ、ちょっとずつ、首があと少しでも右、左に動かせるように。

7、アイソトープ治療

今回は手術後に、アイソトープ治療も受けた。

高濃度の放射性ヨウ素を服用して甲状腺がんを内部被曝させ、がん細胞を破壊する治療だ。

この治療を受ける前は、何よりも食事制限が面倒だ。仕事中は休憩の合間を縫ってコンビニ向かうが、まず見るのは裏に記載されている成分表。あれにもこれにも増粘剤が入っている、増粘剤は、食品に粘度を付ける食品添加物だが、成分にヨウ素が含まれている。あれもだめ、これもだめ、考えるのが面倒。世の中には増粘剤が溢れている。

外食をしても、まず聞くのはやはり成分。増粘剤が入っているか質問すると、その場では対応できず、奥でスタッフがやり取りしているのが見える。彼女にはごめんねと伝える。

アイソトープ治療前は、チラージンの服用も休止する。止めて2週間ほど経過すると、身体がむくみ、手もパンパンに腫れてくる。身体に、異変を感じながらの生活だった。

入院は、隔離病棟。人を被曝させないためだ。

治療前の説明書には、「服用後、性交渉は半年間禁止」とある。目には見えない放射性物質。薬を飲んだところで何も変わらない。それでもダメなものはダメ。

もしかすると生まれてくる将来の命にも影響があるかもしれない。それが気がかりだ。

8、最後に

再発するかもというのは、頭の片隅には常にある。

がんの再発は覚悟しているが、前だけを見たいと考えている。

自分の病気が放射線による被曝の影響と認められるのか。この裁判を通じて、最後までしっかり事実を確認したい。

以上

◆別図 2011年7月27日 文部科学省及び栃木県による航空機モニタリングの結果(C134,C137)
 (文部科学省がこれまでに測定してきた範囲及び栃木県南部における空間線量率)

